

# ムカジーとホーソン —"hybridity"の問題をめぐって—

藤吉 清次郎

(高知大学人文社会科学系人文社会科学部門)

## Mukherjee and Hawthorne — From the Viewpoint of "Hybridity"—

Seijiro FUJIYOSHI

Humanities and Social Sciences Unit, Humanities and Social Sciences Cluster, Kochi University

**Abstract:** Indian American writer Bharati Mukherjee's *The Holder of the World* (1993) is a rewriting of Nathaniel Hawthorne's *The Scarlet Letter* (1850). The purpose of this paper is to make clear how Hawthorne's *The Scarlet Letter* influences Mukherjee's *The Holder of the World* in terms of hybridity or miscegenation.

Beigh Masters, the narrator of Mukherjee's book and a researcher who traces valuable objects for collectors, finds that a diamond called the Emperor's Tear is connected with a Puritan woman named Hannah Easton who became the mistress of a Hindu raja in South India in the 17th century. Entering the world of the virtual reality which her boy-friend Venn produces, Beigh succeeds in experiencing Hannah's life vicariously. Though Hannah goes over to India with her Irish husband, she becomes the passionate paramour of Raja Jadav Singh. After Singh is killed by the Mughal Emperor Aurangzeb, she comes back to Salem with her daughter Black Pearl who is half-American and half-Indian. Unlike Hawthorne's Hester, who secretly leads a life of penitence after returning from Europe, Hannah enjoys her life with Black Pearl in New England, saying "we are Americans to freedom born!" In this way, Mukherjee has written India into the beginnings of American literary history.

What is significant about Beigh's time travel is that she returns to the real world feeling like both American and Indian. At that moment, she feels in her gut that she is "incubating an enormous diamond." This diamond in her gut is the very one she has been looking for. The diamond seems to suggest a racially and culturally hybrid condition. It is interesting to note that Mukherjee as an American to freedom born tries to get over religious and racial borders by evaluating hybridity as most desirable, while Hawthorne presents as offensive any sign of hybridity or miscegenation in Pearl.

**キーワード：**異種混淆, 多文化主義, ホーソン, ムカジー

### はじめに

ナサニエル・ホーソン(Nathaniel Hawthorne, 1804-64)の *The Scarlet Letter* (1850)は1998年にハリウッドで映画化されたが、しかし原作とあまりにもかけ離れていたために多くのホーソンニアンたちがこの映画に大いに不満を抱いたことは記憶に新しい。ヘスター(Hester Prynne)が懲罰の印であるAの文字の布を捨て去り、娘パール(Pearl)とディムズデイル牧師(Dimmesdale)とともに、新天地を目指して清教徒の町から出て行くシーンで終わる映画の結末は、ヘスターが牧師の死後もいったんは旧大陸にわたるも再び、町に舞い戻り、後生Aの文字を付けて悔悟の人生を送ったとする原作の結末と全く異なるものである。ここで私は原作をなかば無視するような描き方をしている映画を価値がないものとして捨象しよう

としているわけではない。確かにこの映画『スカーレット・レター』は先ほど挙げた結末の問題など納得できない要素を持つ作品ではあるが、しかしこの映画は20世紀末のアメリカ社会において重視されているマルチ・カルチュラリズムとフェミニズムの在り方を反映している点で評価に価する。具体的には映画の始まりの場面でも分かるように他民族、とくにアメリカ先住民への配慮が十分なされている。そして、ヘスターの生き方にも現代女性の生き方が反映されている。ある意味では、古典的名作とは多様な解釈を許容してしまうところにその存在価値があると言えるのかもしれない。したがって映画『スカーレット・レター』は原作 *The Scarlet Letter* の再解釈であると考えることができる。

映画『スカーレット・レター』と同様に、マルチ・カルチュラリズムとフェミニズムの観点から *The Scarlet Letter* の再解釈を試みた作家がいる。インド系アメリカ人女流作家バーラティ・ムカジー (Bharati Mukherjee, 1940-) である。彼女は1993年にホーソーンの *The Scarlet Letter* を換骨奪胎して *The Holder of the World* という作品を発表した。ムカジーはこの作品のなかでインドとアメリカの関係がはるか昔から存在していることを指摘し、アメリカ文化が異種混淆の様相を帯びていたことを主張している。私にはムカジーがアングロサクソンをもってアメリカ人とするホーソーンの代表作 *The Scarlet Letter* に異種混淆の問題を読み込んでいることが興味深く思える。

本論では、現代作家ムカジーの *The Holder of the World* を検討することによって、ムカジーの改変の意図を中心に考察し、その上で人種的な観点から *The Scarlet Letter* のもつ現代的な意義を確認したい。

## 1. ピューリタン女性ハンナとインド文化

まず、論をわかりやすくするために *The Holder of the World* の粗筋から述べておこう。

ハンナ・イーストン (Hannah Easton) は、レベッカ (Rebecca) を母に、エドワード (Edward) を父に1670年にアメリカのマサチューセッツに生まれる。エドワードはハンナが生後まもなく蜂に刺されて亡くなる。その後、レベッカはアメリカ先住民の恋人とともに去っていく。そこで、ハンナはピューリタンのフェッチ (Fitch) 夫妻の養女となる。その後ハンナは東インド会社に勤めるアイルランド人のガブリエル・レジー (Gabriel Legge) と結婚し、夫妻はイギリスへ移住するが、のちに夫妻はともにインドへと旅立つことになる。

インドにおいてハンナは、"[b]lack bibis" (133) と呼ばれる「妾」がいることを知ることになるが、夫ガブリエルは妾と一緒にいるところを何者かに襲われ、その女性を家に連れ帰る。<sup>1</sup> ハンナはそのような状況に耐えられず、家を出るが、ムガールの王ジャダヴ・シン (Jadav Singh) に助けられ、彼の庇護のもとに暮らすこととなる。このふたりは恋に落ち、ハンナは "Salem Bibi" (5) と呼ばれる存在となるが、後に彼女はシンとの間にブラック・パール (Black Pearl) と呼ばれる子供をもうける。

だが、ふたりの幸せは長続きしない。ムガールの王シンはイスラムの皇帝アウランゼーブ (Aurangzeb) との戦いで破れ、命を落としてしまう。その結果、ハンナは皇帝の手元におかれ、ホワイト・パール (White Pearl) と呼ばれ、平穏な日々を過ごす。その後、彼女はアメリカに戻り、縫い物で生計を立て、ブラック・パールとともに暮らすこととなる。ハンナは人々に自らの経験を語るがその話を聞いていたうちのひとりが、ホーソーンの曾祖父ジョゼフ (Joseph) である。

300年以上前に生きたハンナ・イーストンに関する史的情報を収集し編纂するのが、現代のピューリタン娘ベイ・マスターズ (Beigh Masters) であり、その手助けをするのが、彼女のインド人の恋人でマサチューセッツ工科大学 (MIT) においてコンピューター科学を専攻するヴェン・アイヤー (Venn Iyer) である。ベイは自分の仕事である古美術の顧客の依頼により、"Emperor's Tear" (47) と呼ばれる世界で最も完璧なダイヤモンドを探すことになる。彼女は調査の過程でこのダイヤモンドの在処が17世紀に生きたハンナと深く関わっていることを知る。実は、ダイヤモンドは彼女の恋人であるジャダヴ王を倒した皇帝 "The Holder of the World" (281) の象徴であり、それを最後に眼にしたものがハンナである。ベイはヴェン

の力を借りて、バーチャル・リアリティの技術を駆使してダイヤモンドが隠された場所と時代へ赴き、ハンナの人生を追体験する。

以上のような物語でムカジーが展開しようとしているのはホーソンが *The Scarlet Letter* において語りきれなかった歴史の影の領域である。それは物語の結末で "Who can blame Nathaniel Hawthorne for shying away from the real story of the brave Salem mother and her illegitimate daughter?" (284) という語り手ベイ・マスターズの言葉から窺い知れる。この言葉から私たちは、ムカジーが *The Scarlet Letter* の核心に異種混淆の問題を看取し、"the real story of the brave Salem mother and her illegitimate daughter" を描こうとしていることが理解できる。では、ムカジーはどのようにハンナを描き出しているのであろうか。

ハンナとはどういう人物か。語り手は 12 歳のハンナについて、次のように述べている。

On a field of light blue, Hannah created an "uttermost shore." A twelve-year-old Puritan orphan who had never been out of Massachusetts imagined an ocean, palm trees, thatched cottages, and black-skinned men casting nets and colorfully garbed bare-breasted women mending them; native barks and , on the horizon, high-masted schooners. ... In the distance, through bright-green foliage, a ghostly white building — it could even be the Taj Mahal — is rising.

That little embroidery is the embodiment of desire. (44)

12 歳のハンナは白人の社会とは異なる未知なるものに対して旺盛な好奇心を有する少女として描かれている。ここでハンナの刺繍が彼女の欲望の具体的な表出だと述べられているが、語り手は別の箇所です "Her embroidery gave away the conflict she tried to deny or suppress." (42) と述べており、*The Scarlet Letter* のヘスターの場合と同様に刺繍がハンナの内的葛藤・情念の捌け口になっていたことが理解できる。そのような葛藤を抱えたハンナを語り手は "a person undreamed of in Puritan society" (59) と捉え、 "Of course she must suffer 'spells' and be judged an invalid." (59) と述べている。ホーソンのヘスターがそうであったように、ハンナは父権制の社会が押しつける女性の役割分担に違和感を抱く女性であった。<sup>2</sup> 上記の性質をもつハンナが夫とともにインドに渡ることは当然の成り行きであったと考えられる。

ハンナはインドにおいて、さまざまなことを学ぶが、その中のひとつはピューリタン社会では決して知り得なかったことであったと語り手は述べている。

With Gabriel she had clung to Salem's do's and don'ts. She had pulled and pummeled the familiar rules, hoping they'd help make sense of her own evolution. With Jadav Singh, she's finally accepted how inappropriate it was in India — how fatal — to cling, as White Towns tenaciously did, to Europe's rules, She was no longer the woman she's been in Salem or London. The *qsbas* and villages of Roorconda bore no resemblance to the fading, phantom landscapes where she's lived in Old and New England. Everything was in flux on the Coromandel coastline. The survivor is the one who improvises, not follows, the rules. (234, 下線部は筆者)

ハンナは夫ガブリエルと一緒にいるときはセイレムの慣習に従っていたが、シン王とともにいるとき、インドではヨーロッパのルールに固執することが不適切であり、致命的であることを認識する。彼女はもはやセイレムにいた頃の女性ではなかった。彼女は流動的な社会で生き残ることのできるルールを作ることができる逞しい女性となっているのである。その過程でハンナはインドにおいてこれまで想像もしたことがなかった女性の在り方を知ることになる。次の引用文において私たちはハンナの心的変化をはっきりと読み取ることができる。

And yet it was here in India that she felt her own passionate nature for the first time, the first hint that a world beyond

duty and patience and wifely service was possible, then desirable, then irresistible. (237)

ハンナはインドにおいてはじめて、自らの情熱的な性を意識し、「妻としての義務、忍耐、役割を超えた世界」が存在しうるのであり、それが抗いがたいほど魅力的なものであることを知る。言い換えるとハンナはインドにおいて、性的な「越境」を果たし、女性に課せられた縛りから解放されたという充実感を味わうのである。

ハンナはインドにおいて、そうした性的な「越境」を果たすだけではない。ムガール王シンを愛し、一子をもうけたという事実は彼女が人種的な「越境」を果たしたことを意味する。まさしくこの二つの越境の経験によってハンナはセイレムに止まっていれば到底達し得なかったような認識を獲得しているわけであるが、そのことはセイレムに戻ったこの女性について語る語り手の言葉の中に確認できる。

Hannah/ Pearl returned to Salem with the infant and immediately began the search for her mother. She found her in a workhouse for the mad and indigent in Providence Plantations, speaking some tribal gibberish and insisting on wearing her outmoded woolens with the shameful *I* boldly sewn in red to her sleeve. It meant "Indian lover," though there was no sign, apart from the progeny, of the Indian's existence. She claimed he'd been killed raiding chicken coops to feed his children. And her daughter had a badge as well, her black-eyed, black-haired, lively daughter, named Pearl Singh. The town gossips named them White Pearl and Black Pearl. (284)

セイレムに戻ったハンナはまず、母親をさがす。母親のレベッカは精神異常者や貧困者たちのための施設に収容されているが、彼女はアメリカ先住民の分からない言葉で、袖に赤い「I」の文字を刺繍した布をつけると主張している。その「I」は「Indian lover」を表しているのであるが、レベッカによれば、その先住民の恋人は鶏舎を襲ったとき殺されてしまったという。インドで新しい知恵を得たハンナは今や、先住民を恋人とし、そのためにピューリタン社会から排除された母親レベッカの心情を理解しているはずである。

ここでアメリカに戻ったハンナの生き方をより明確なものにするためにホーソーンのヘスターを引き合いに出しながら考察してみよう。ハンナが幼い頃、母親レベッカに次のような教えを受ける場面がある。

"A is for Act, my daughter!"...

"B is for Boldness," Hannah pledged. "C is for Character. D is for Dissent,

E is for Ecstasy, F is for Forage..."...

"I is for Independence," said Hannah. (54)

後のハンナの人生から判断すると、レベッカが教えた"Act", "Boldness", "Dissent"などの言葉が彼女の生きる指針となっていることは明らかである。これらの言葉はピューリタンの白人男性社会が女性に要求する既成の女性観と対立するものであるが、レベッカの主張はわれわれ読者に、自らの犯した罪を悔悛する前のヘスター・プリンを想起させる。ホーソーンの描くヘスター・プリンは情熱的で、大胆であり、共同体の制度にも抗う独立精神の持ち主であった。

しかし、帰国後のハンナは、ホーソーンのヘスターとは異なる生き方をしている。ホーソーンのヘスターはパールとともに旧大陸へ渡るが、ニューイングランドに単身戻ってきた後は、自らの自由意志で恥辱の印である「緋文字」を身につけ、利己的な目的を持たず、町の人々に献身的に尽くす悔悟の人生を送る。その意味では帰国後のハンナの人生はホーソーンのヒロインのそれと対照的である。

Salem children were warned about the small house jammed with brass and copper items, called by many the House of Enchantment, meaning the place of ultimate debauchery. They were warned of ingesting the attitudes of such a house,...where all the inhabitants, particularly the younger generation, carried the double taint of voluptuaries' blood, where seditious sentiments were openly aired. "We are Americans to freedom born!" White Pearl and Black Pearl were heard to mutter, the latter even in school. (285, 下線部は筆者)

ハンナ親子の住む家はピューリタン社会において墮落と放蕩の館として危険視されたという。彼女は当時としてはピューリタン社会の土台を脅かす危険思想であった「私たちは自由に生まれついたアメリカ人である」という台詞を口に、娘のパールと共にこの台詞をつぶやいているのが聞かれたという。しかもブラック・パールは学校でもつぶやいていたという。アメリカの歴史の始まりの時期に、混血児パールがその台詞を学校で口にしていたということはアメリカ文化の多元性の観点から重要な意味をもつであろう。

最後にセイレムでのハンナの生活はどのようなものであったかを確認してみよう。

White Pearl eked out a living as a nurse, veterinarian, even, on rare occasion, doctor. Responsible citizens avoided her services, but she did enjoy a clientele of divers men and women who came from curiosity and stayed for the wealth of her storytelling, the pungency of her opinions. A more refined age in a more sophisticated city might have called it a salon. (285)

ハンナは看護師、獣医師、時に医者として生計を立てたのであるが、様々な人が彼女の豊富な話と彼女の刺激的な意見を求めて集まったという。語り手が「もっと洗練された町で洗練された時代であれば、その集まりをサロンと呼んだかも知れない」と述べていることを考えると、ハンナの影響力は歴史の表舞台には現れてきてはいないが、決して無視できるものではなかったのではないかと思われる。

ムカジーは物語の結末においてハンナ親子をホーソンの先祖ジョゼフ—魔女裁判の判事として知られるジョン・ホーソン(John Hathorne)の息子—と邂逅させ、彼が影響を受けたという可能性を示唆している。

[Joseph Hathorne] seemed to have found in her company, doing odd jobs, running errands, a corrective to the orthodoxy of his household. He even went to sea, driven from the taint of Salem, drawn by the stories of the China and India trade that White Pearl related as she sewed. His great-grandson, Nathaniel Hawthorne, was born in Salem in 1804. (285, 下線部は筆者)

下線部から判断すると、ハンナの存在によってジョゼフは自らの家の「正統な」考えを矯正する手段を発見したようである。言い換えるとハンナという女性との交流のなかで、彼は白人優位主義的な思考を改め、他文化を容認するような考えをもつようになったのではないだろうか。ジョゼフが船乗りになったのも、ハンナに刺激され、彼が中国やインドへの興味を抱いたからだと推察される。ここでムカジーが示唆したいことはホーソンがハンナという女性に強い影響を受けた祖先を持つ作家であり、彼の文学世界もインド文化という異文化と無関係ではないということであろう。

## 2. 語り手ベイ

先に述べたように、*The Holder of the World* においてムカジーは 20 世紀に生きるベイ・マスターズと

いう若い白人女性に 17 世紀に生きたハンナの人生を探求させ、語らせている。なぜムカジーはベイを語り手、あるいは登場人物のひとりとして物語に参入させたのか。ここでベイの人物造型を考察してみたい。

そもそもベイがハンナの人生に興味を持った主要な要因とは何か。

Asa Brownledge's American Puritans seminar... set in motion a hunger for connectedness, a belief that with sufficient passion and intelligence we can deconstruct the barriers of time and geography. Maybe that led, circuitously, to Venn. And to the Salem Bibi and the tangled lines of India and New England. (11)

ベイはイエール大学におけるアメリカ・ピューリタンに関するセミナーに参加し、インドとアメリカの「つながり」("connectedness")を探りたいという衝動に駆られるが、彼女は自分とインドとの関わりが偶然のものではないことをはっきりと意識している。

There are no accidents. My Yale thesis on the Puritans did lead to graduate school, but it also took me here. My life with Venn Iyer, father of fractals and designer of inner space, is no accident. (19, 下線部は筆者)

ベイは恋人のインド人ヴェンとの関係のなかにも必然的な要素を見いだしている。そして "I'm part of this story, the Salem Bibi is part of the tissue of my life." (21) と述べる時、彼女はハンナの物語が自分の物語でもあることに気づいているのである。

ところで、ムカジーはホーソーンの *The Scarlet Letter* のヘスターを意識して、同名の人物を登場させている。ベイの人物造型を理解する上で「ヘスター」は重要な存在であると思われるので、この人物の存在意義を検証してみたい。*The Holder of the World* ではヘスターの名前はふたりの人物に対して使われている。ひとはセイレムにおけるハンナの白人の親友ヘスター・マニング (Hester Manning) である。もうひとは、ハンナのインド人の親友であり、インドにおいてビンデュ・バグマティ (Bindu Bhagmati) という名前で登場し、ハンナがヘスターと呼んだ召使いである。ハンナとの親密な関係から判断すると、このふたりのヘスターはハンナの分身的な存在とも考えられるが、ここでは後者のヘスターに注目したい。というもの、物語では「帝王の涙」を探すためにベイが恋人ヴェンの作ったヴァーチャル・リアリティの世界— 17 世紀のインド— に参入し、このインド人のヘスターの人生を経験し現代アメリカにもどってくるという展開になっているからである。

ビンデュ・バグマティのバグマティという姓は前の主人で恋人でもあったイギリス人ヘンリー・ヘッジズ (Henry Hedges) によって与えられたものであるが、結局このインド人の女性は死後、ヘスター・ヘッジズ (Hester Hedges) として葬られる。物語の最後において世界で最も完璧なダイヤモンドである「帝王の涙」が彼女の身体の中にあることがわかるが、重要なのはその宝石を発見するのがベイであることである。なぜ、ベイはダイヤモンドの在処が分かったのであろうか。そして、そもそも「帝王の涙」がインド人でピューリタンの名前を持つ女性の身体の中にあるという物語設定をどのように考えればよいのだろうか。

ここで注目したいことは白人であるベイがヴァーチャル・リアリティの世界において、このビンデュ・バグマティとして、インド人でもあるという体験をしていることである。物語の結末部において、驚くべきことに読者はヴァーチャル・リアリティの世界に参入したベイがビンデュ・バグマティとなり、ハンナとともに戦闘のまっただ中を知ることになる。ベイ＝ビンデュ・バグマティは被弾し、自害することになるが、その際、彼女は "[W]ith my dying breath I plunge the diamond into the deepest part of me." (283) と語っている。そしてヴァーチャルな世界から現実世界に戻ったベイはダイヤモンドについて、次のように

述べている。

My shoulder still throbbed, and it continues to ache at night, and sometimes I feel in my gut that I really am incubating an enormous diamond. (283, 下線部は筆者)

ベイはお腹に巨大なダイヤモンドを宿していると感じている。この体験によりベイは「帝王の涙」がヘスター・ヘッジズのお墓にあることをはっきりと認識するに至るのだが、一体なぜヴァーチャル・リアリティの世界から脱出したベイがダイヤモンドを宿していると感じられたのか。ベイの経験から判断すると、ムカジーが「最も完全な宝石」によって言い表したかったのは人種という枠を超えた、異種混成体と関係があると思われる。<sup>3</sup> この点、語り手のベイ自身が様々な文化的経験を果したハンナのアイデンティティを "her Christian-Hindu-Muslim self, her American-English-Indian self" (268) と定義づけていることから分かるように、ムカジーは宗教的な意味でも人種的な意味でも混成的な状態の自己を「世界で最も完全な宝石」という言葉で暗示しているのではないかと推察される。<sup>4</sup>

## 結び

これまで考察してきたように、ムカジーはホーソンの *The Scarlet Letter* を脱構築して *The Holder of the World* を創作している。この作品においてこのインド系アメリカ人作家は20世紀アメリカに生きる若い女性ベイ・マスターズに17世紀に生きたひとりのピューリタン女性ハンナの人生を探求させることによってアメリカ文化がその始まりから、ハイブリッドな要素を有していたことを描き出しているのである。最後に *The Scarlet Letter* と *The Holder of the World* の結末の差異を確認し、ムカジーの改作の意図と、ホーソンの作品の現代的意義を考察しておこう。

ホーソンはその作品の結末において不義の子パールをアメリカ国外に脱出させたうえで、ヘスターには父権制社会のなかでAの文字を付けさせ、悔い改めの人生を用意する。この結末はこの白人男性作家がヘスターに一定の同情を示しながらも、白人(アングロサクソン系)中心主義の歴史・文化を是認せざるを得なかったことを示唆するものだと言えるだろう。

一方、*The Holder of the World* ではムカジーはハンナに、シン王との間にできた混血児ブラック・パールとともにセイレムで人生を送らせている。17世紀のピューリタン社会において、異人種混淆の証であるブラック・パールとともに暮らすことが非常に過酷なものであったことは想像に難くないが、ハンナが混血児の娘と白人社会で暮らすことをあえて選択したのは、先に述べたようにインドでの生活を体験した彼女が "We are Americans to freedom born!" という信念を持っていたからにほかならない。"Of all the qualities I admire in Hannah Easton that make her entirely our contemporary in mood and sensibility, none is more touching to me than the sheer pleasure she took in the world's variety." (104) の箇所から分かるように、語り手ベイは "the world's variety" を楽しむハンナの資質に憧れを抱いている。混血児ブラック・パールとともに力強く生きていくこの女性の生き方が多元文化国家、多人種国家アメリカに生きるベイにひとつの指針を与えたことは間違いないであろう。

以上のように、ムカジーはこの改変小説においてヘスターが十全には果たしえなかった、人種的・文化的・ジェンダー的な「越境」をハンナに遂行させ、そのことを肯定的に捉えている。この作家は文化的・人種的混淆について、あるインタビューのなかで次のように述べている。

To resist cultural and ideological mutation simply because one wants to retain racial/cultural/religious/caste "purity" is, in my opinion, evil. I'm against that kind of Hitlerian racial and ethnic pride; I'm against the retention of "pure culture" for the sake of purity.<sup>5</sup>

ここでムカジーは、人種的・文化的・宗教的純潔を守るためだけに混雑性に抗うことを悪であると述べている。多文化主義社会であるアメリカにおいて、有色移民作家として生きるムカジーにとって、人種的・文化的混雑こそ、自然な在り方であったらうと思われる。この点、Nalini Iyer は "*The Holder of the World* criticizes canonical American literature's white centredness by forcing the recognition of the immigrant experience and the multicultural aspects to American history." (42) と述べているが、これは妥当な意見だと思われる。<sup>6</sup>

最後に、人種的混雑性という観点から *The Scarlet Letter* の現代的意義を確認しておこう。私は *The Scarlet Letter* の中でパールという娘が混血児であるという可能性が仄めかされていなければ、あるいはこのホーソーンの作品に文化的・人種的混雑の要素が示唆されていなければ、ムカジーはホーソーンの作品を素材にして作品を創造することもなかったのではないかと考えるものである。<sup>7</sup> *The Scarlet Letter* におけるパールの人種的混雑、あるいは人種問題については、Jay Gross が19世紀中葉アメリカの人種の文脈を踏まえた上で、ディムズデイル牧師を黒人のイメージが付与された人物だと捉え、彼とヘスターとの間にできたパールが混血児であるという示唆的な見解を提出している (Gross14, 17)。その点、*The Scarlet Letter* から12年後に発表された戦争紀行文 "*Chiefly about War-Matters*" は極めて重要な作品である。この中でホーソーンは清教徒ばかりか黒人奴隷を運んだとされるメイフラワー号のイメージを利用しながら、アメリカ国家の起源の曖昧性、つまりアメリカ国家の「白」と「黒」の「怪物的な」 ("monstrous") 混雑性を語ったが、<sup>8</sup> その混雑性の問題は *The Scarlet Letter* のパールの人物造型の中にすでに暗示的に表れていたものであり、それをムカジーは看取り、「ブラック・パール」という混血児を創造したと推察される。ある意味で *The Scarlet Letter* の有する人種的・文化的混雑性がムカジーというインド系アメリカ人に *The Holder of the World* を書く動機を与えたと言えるかも知れない。このように考えると、ハイブリッドな要素を有する *The Scarlet Letter* は多文化主義社会・多民族社会であるアメリカにおいて、その重要性を保ち続け、ムカジーのような移民作家、非白人作家を刺激してやまないだろうと思われる。

## 注

1. バラティ・ムカジーの作品については、*The Holder of the World* (New York: Knopf, 1993) を使用した。
2. *The Scarlet Letter* のヘスターの容姿に関しては、ダーク・レディの特徴である黒目、黒髪を有している。一方、ハンナの髪の色はブロンドである。この点 Judie Newman は "Mukherjee's rewriting certainly allows her more 'fun' than Hawthorne allows his dark lady." (84) と述べているが、これはある意味、ハンナの白人性と彼女を取り巻く男性の有色人性の対照をより明確なものにするムカジーの意図があったと考えられる。
3. Nalini Iyer は "Mukherjee is indicating that identities are fluid and not overdetermined by sex or race." (41) と述べている。
4. Beigh Masters という頭文字 B.M. は Bharati Mukherjee の B.M. と一致していることから、ベイはムカジーの分身的な存在だと思われる。
5. "Holders of the Word: An Interview with Bharati Mukherjee." by Tina Chen and S.X. Goudie
6. Lawrence Buell は "I am an American writer, in the American mainstream, trying to extend... I am not an Indian writer, not an exile, not an expatriate. I am an immigrant." というムカジーの主張を注目しつつ、"*Holder* finally becomes still another self-identified American writer's rewriting of an American classic." (85) と指摘している。
7. ヘスター・プリン的人物造型における東洋的要素については、Luther S. Leudtke, *Nathaniel Hawthorne and the Romance of the Orient* に詳しい。
8. "There is an historical circumstance, known to few, that connects the children of the Puritans with these Africans of Virginia



in a very singular way. They are our brethren, as being lineal descendants from the May Flower, the fated womb of which, in her first voyage, sent forth a brood of Pilgrims upon Plymouth Rock, and, in a subsequent one, spawned Slaves upon the Southern soil;— a monstrous birth, but with which we have an instinctive sense of kindred, and so are stirred by an irresistible impulse to attempt their rescue, even at the cost of blood and ruin. The character of our sacred ship, I fear, may suffer a little by this revelation; but we must let her white progeny offset her dark one, — and two such portents never sprang from an identical source before!" (*The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne* XXIII, 420 ; 下線部は筆者)

ここでホーソンはアメリカ国家誕生の起源の曖昧性、混濁性を指摘しているわけであるが、この作家はそうした混濁性を豊饒の源とは必ずしも捉えていない。

#### WORKS CITED

- Buell, Laurence. "Hawthorne and the Problem of "American" Fiction: The Example of *The Scarlet Letter*." In *Hawthorne and the Real: Bicentennial Essays*. Ed. Millicent Bell, 70-87. Columbus: Ohio State UP, 1997.
- Gross, Jay. "'A' is for Abolition?: Race, Authorship, *The Scarlet Letter*." *Textual Practice* 7 (Spring1993): 13-20.
- Hawthorne, Nathaniel. *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Ed. William Charvat et al. 23vols. Columbus: Ohio State UP, 1962-97.
- Iyer, Nalini. "American/Indian: Metaphors of the Self in Bharati Mukherjee's *The Holder of the World*." *ARIEL*27 (1996): 29-44.
- Leudtke, Luther S. *Nathaniel Hawthorne and the Romance of the Orient*. Bloomington: Indiana UP, 1989.
- Mukherjee, Bharati. *The Holder of the World*. New York: Knopf, 1993.
- \_\_\_\_\_. "Holders of the Word: An Interview with Bharati Mukherjee." 1997. by Tina Chen and S.X. Goudie.  
<http://english.chass.ncsu.edu/jouvert/v1i1/BHARAT.HTM>
- Newman, Judie. "Spaces In-Between: Hester Prynne as the Salem Bibi in Bharati Mukherjee's *The Holder of the World*." 69-87. In *Negotiating Boundaries in Post-Colonial Writing*. Ed. Monika Reif-Hulser. Amsterdam: Rodopi, 1999.
- Person, Leland S. "The Dark Labyrinth of Mind: Hawthorne, Hester, and the Ironies of Racial Mothering." 656-669. In *The Scarlet Letter and Other Writings*. Ed. Leland S. Person. NY: W.W. Norton & Company, 2005.

\* 本論文は、平成22年度科学研究費補助金基盤(C)「ホーソンと人種問題」による研究成果の一部である。

平成22年(2010)12月15日受理  
平成22年(2010)12月31日発行